

週刊 武四郎

●毎月第二週は、
松浦武四郎と北海道に
ついてご紹介します

第10号

2018年(平成30年)6月13日(水)
発行・松阪市

監修・松浦武四郎記念館

年俸六千両

明治元(一八六八)年、江戸は彰義隊の騒動で大混乱の頃のある日、武四郎さんの元に官軍兵がやって来ます。すわ何事?!と驚く武四郎さんに渡されたのは、大総督府参謀からの「至急上洛し蝦夷地のことについて大久保利通と面談せよ」との召状でした。

これは一大事です。武四郎さんはまず友人宅を訪ねました。袴を貸してもらうためです。なんと武四郎さん、蝦夷地探検のあとは江戸市中でひっそりと著述生活を送っていたので、袴のひとつも持っていなかったのです。借りに行った先の友人は、のちに次のように語っています。今度御用にて京都に上らねばならないが、何にせよ例の貧弱で大切な袴がなくて困る。依て一着恵まれよ、とのこと

である故、早速余は承諾し、首途の餞別として一領の袴を贈りしに、翁(武四郎のこと)は大に欣び、再三礼を述べて帰って行った。

さて袴を調達した武四郎さん、道中は乞食に身をやつして京に向かいました。官軍が続々と東上する中で、逆に京に向かう怪しい者は容赦なく斬り捨て、という噂があったからです。

武四郎さんと蝦夷地の今後について話合った大久保はすっかり感服してしまって、蝦夷地はこの男に任せよう、と決断します。武四郎さんは数日後、太政官に出頭するよ

うにとの連絡を受けて、道中と同じような乞食同然の姿で出かけていくと、いきなり徴士箱館府判事に任ぜられ、従五位下に叙す、と申し渡されたのです。突然のことに思わず武四郎さんが、

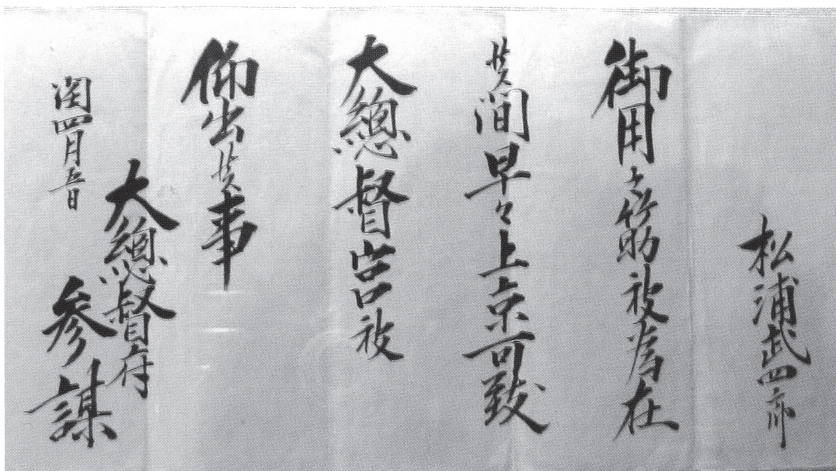
「私は乞食の通りいまだ家もなき

素寒貧で、それが従五位下となっても仕方がない」

と言いつ返したところ、

「なんでも黙ってお辞儀さえしていればよろしい。けっしてものな言つてはよろしくからず」

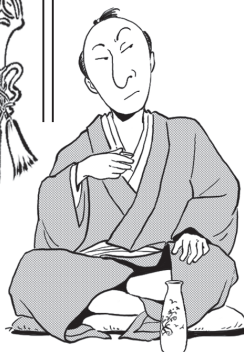
と一喝されて、武四郎さんは仕方なくお辞儀をして帰ってきたといひます。なんだかとても武四郎さんらしいですね。あとでわかったのですが、この箱館府判事の年俸はなんと六千両だったそうです。



▲「上京の召書」大総督府参謀 慶応4年(1868) 戊辰戦争が続く中、江戸城が開かれると、51歳だった武四郎は登城するよう呼び出され、京都へ行くことを命じられた。(松浦武四郎記念館蔵)

松浦武四郎 (1818～1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として(北海道)のもととなる(北加伊道)を含む6案を政府に提案したことから(北海道の名付け親)と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中!

